

Kurt Flasch  
*Meister Eckhart: Die Geburt der «Deutschen Mystik»  
aus dem Geist der arabischen Philosophie*

C. H. Beck, 2006, pp. 192

---

加藤 希理子

本書は、アヴェロエスを中心とするアラビアの哲学者が、エックハルト思想においていかなる意義を有しているのかを、著者の広範な見識に基づいて考察したものである。著者であるフラッシュ氏は、かねてよりエックハルト思想を当時の思想史的連関の内て解釈し、そのトマスへの批判的態度を提示してきた。エックハルトの思想にトマスと異なる要素が含まれていることは、早くから指摘されていた。なかでも19世紀後半、エックハルトのラテン語著作を発見したデニフレが、彼をトマスから逸脱した「不明瞭な思想家」として断罪したことはよく知られている。本書の特色は、そうした非トマスの要素の由来を、主にアヴェロエスから説き明かしていく点に存しているが、著者は、アヴェロエスからエックハルトへと飛躍するのではなく、両者の間の「中間段階 (Zwischenstufen)」が顧慮されなければならないとする。著者はこの「中間段階」を、エックハルトと同じくドイツ人ドミニコ会士であったアルベルトゥス・マグヌス、ディートリッヒ・フォン・フライベルクの内に見る。そして、著者は、エックハルトを歴史的連関の内て把握しつつ、あくまでもエックハルトを独立した「独創的な精神」として示そうとしている。

まず第1章において、アヴェロエスとエックハルトが各々生きた世界 (Lebenswelten) が描写される。後者について述べると、1270年の禁教から1323年のトマスの列聖に至るまでの思想史的状況が、アリストテレス受容とアヴェロエスによるアリストテレス解釈をめぐる論争に重点を置いて丹念に説明されていく。その際、トマスの列聖は、アヴェロエスに対するトマスの勝利を意味するものとして捉えられ、アリストテレスの脱アヴェロエス化、ドミニコ会指導部によるトマス主義化への強制とそれに対抗するドミニコ会における反トマスの

な動向という対立構造が明確にされる。著者は、ディートリッヒとエックハルトがこうした状況の下、反トマスのな思想を展開したとみなしている。

アヴェロエスについて論じられる第2章において、著者は、アヴェロエス主義を神学者による「虚構」とみなして、アヴェロエスをアヴェロエス主義から切り離し、アヴェロエスのテキストにのみ沿って考察を進める。ここでのアヴェロエスに関する記述は、そのほとんどが知性論に割かれており、著者は、以下のようなアヴェロエスの知性論が、後世、とりわけエックハルトにとって重要なものとなったと主張する。紙片の都合上、本稿では知性論にほぼ限定して述べることとなるが、著者が、知性論をアヴェロエスの唯一の論理とみなすことの「不利益」をも指摘していることは記しておかねばならない。アヴェロエスは、アリストテレスにおける知性の非質料性、非混合性、離在性を強調し、知性の内に人間の完成を見る。彼は、アリストテレスにおける「認識するものと認識されるものの一一致」から出発したが、アリストテレスのテキストを越え出て、その「知的な幸福と合体」の論理を展開したとされる。それは、すなわち個々の人間が、知的な生において、離在的知性と結合し、それがわれわれの形相となることであり、そうした知的な生は、「高貴な人間への道程」として捉えられているという。著者によれば、こうした知と生の一一致のモチーフは、アリストテレス—アヴィセンナ—アヴェロエス—アルベルトゥスに続いて、エックハルトやダンテに見出せるとする。

続く第3章において、アルベルトゥスが取り上げられ、彼がアヴェロエスに対してどのような態度を取ったかが考察される。著者は、アルベルトゥスが、「トマスの前にアヴェロエスと闘った」というよりは、後の世代が「偏見なく」「アラビアの思想家に関わる機会を創った」(70頁)という点に重きを置き、アルベルトゥスのアヴェロエスに対する「親愛」を強調する。アルベルトゥスは、アヴェロエスに倣い、知性認識を人間の完成とみなして、人間の自然本性的な至福について言及し、能動知性が可能知性を形相づけること、すなわち「離在的知性」との結合により知性は「神的に」なり、人間は神に類似したものとなり、すべての存在者を認識するとした。また、彼の知性認識論と自然哲学の関連も指摘される。彼の宇宙論にはプロクロスの影響が見出されるが、アルベルトゥスにとって重要であったのは、自然の研究と認識を通じての「正しい生」であり、この点で彼はアリストテレス—アヴェロエスに従っているという。

第4章においては、ディートリッヒについて論述される。著者は、ディートリッヒを「アヴェロエス—アルベルトゥスとエックハルトの間の失われた環 (das missing link)」と呼び、アヴェロエス—アルベルトゥスとエックハルトをつなぐキーパーソンとみなし、エックハルトのスタンスを準備したと考えている。著者によれば、ディートリッヒのアヴェロエスへの接近は、彼の同時代人と比して度を越えている。むしろそうした接近は、無条件になされたのではなく、例えば、彼は、アヴェロエスが可能知性を分離実体とみなしたことを批判している。そして彼は、能動知性を人間の最高の段階、「神の像」とし、アウグスティヌスの『三位一体論』における人間精神の理論を同一視した。ディートリッヒの思想は、1300年頃のドミニコ会指導部において、明確な反トマス主義が存在していたことを示すものであるとされ、知性認識と至福の理論を巡ってのディートリッヒの反トマスの態度とトマス及びトマス主義者との闘争が強調される。すなわちトマスが精神の本質はそれ自体としては神の本質を把握する能力はないとし、恩寵が付け加えられることにより可能であるとするのに対し、ディートリッヒは、恩寵を偶有的な付加とみなして、精神の本質に偶有性は付け加えられないというアリストテレス、アヴェロエスの哲学的モチーフを展開し、人間の自然本性的な至福直観を主張して、神と魂の緊密な関係を示す。この点はエックハルトに継承されるという。

第5章は、「エックハルトとアヴェロエス」と題して、エックハルトにおいてアヴェロエスが「抜きん出た役割を果たしていた」こと、また、エックハルトが、「哲学者たちの自然的論証によってキリスト教教義の真理を証明するという彼の計画を遂行するために、アヴェロエスを活用した」(121頁)ことを主張する。著者がエックハルトとアヴェロエスの結びつきに関して重要視するのは、「認識するものと認識されるもの的一致」、すなわち知性とその認識対象との一致であり、それこそが『ヨハネ福音書』における「私と父は一つである」という言葉の意味であるとエックハルトは理解したのだと示される。エックハルトは、このアヴェロエスの知性論をディートリッヒから継承し、三位一体論と結び付け、認識作用、認識対象(父)、生まれた知識(子)が認識するものにおいて一であるとしたのだという。こうした見解から推測されうることであるが、著者は、アヴェロエスが、エックハルトの聖書解釈において非常に重要な役割を果たしていると指摘する。とりわけ彼の主著である『ヨハネ福音書註解』においては、アヴェロ

エスが鍵となるとされる (118, 121 頁)。また、ディートリッヒとエックハルトの差異についても言及され、ディートリッヒが、能動知性による可能知性の変容を通しての神との結合 (coniunctio) を主張するのに対し、エックハルトにおいては、認識対象である神と認識する知性の一致、「神と義である限りの人間との一性 (Einheit)」が重要な問題となっているとされる。

以上のようなアヴェロエスを軸とした叙述を受けて、第 6 章、第 7 章においては、エックハルトが置かれていた錯綜した思想史的連関を解明するために、それぞれアヴィセンナ、マイモニデスとエックハルトの関係が詳細に考察される。著者は、ディートリッヒとエックハルトを各々「自立した思想家」であり、両者の差異性が彼らのアヴィセンナ、マイモニデスとの関係の内に現れているとする。著者によれば、ディートリッヒは、アヴィセンナを限定的に取り入れたにすぎないが、「エックハルトにとってははるかに重要であった」のであり、また、マイモニデスは、ディートリッヒにおいて全く登場しないのに対し、エックハルトの思想の方向性の決定に関わっているという。アヴィセンナとエックハルトの関係について、著者は、エックハルトにとってアヴィセンナの魂論が重要であったとする。エックハルトは、アヴィセンナの「魂が二つの顔を持つ」という表現に基づいて、魂を肉体の形相であると共に、「その本性上」普遍的な知性世界への移行であるとし、魂の二つの側面を区別したとされる。

第 7 章では、エックハルトとマイモニデスの関係として、両者の共通点が論じられる。ここで興味深いのは、「聖書が二人の思想家にとって哲学の書物であった」(141 頁) とされる点であろう。著者は、旧約聖書の真理について、エックハルトが、「比喩的な字句の覆いの下に、哲学、とりわけアリストテレスの自然哲学が隠されていることを、哲学的論証の助けを借りて示そうとした」のであり、その際、彼にとって、マイモニデスの聖書解釈の方法論が「模範的な意義」を有していたとする (141 頁)。

終章である第 8 章では、総括と共に、ドミニコ会士エックハルト・フォン・グリュンディッヒにより著述されたと思われる『能動知性と可能知性』の分析を通じて、すでに第 4 章で論述された至福理論をめぐる対立について再度詳細に論じられ、至福が恩寵によるのではなく、知性はその本性から至福であるという非トマス的な理論の主張を、「アヴェロエスの遺産をめぐる闘争」として描き出している。

本書の意義は、著者自身が述べるように、従来一般的でなかった、エックハルトをアヴェロエス的な理性主義の内では解明するという作業によって、哲学者としてのエックハルト像、エックハルトの非トマス的な側面を浮き彫りにしたことに存する。彼の哲学の精髓は、哲学を神学と相互に矛盾することのないものとして結び付けた点に収斂されていると思われる。そのことは、著者が、「エックハルトの釈義とは、哲学者の自然的理性によって真理を明確にすることである」と述べていることから窺える。本書に従えば、エックハルトは、自然的な理性ないし知性に基づく人間の完成を、アヴェロエス、アルベルトゥス、ディートリッヒから継承したこととなる。以上の観点から著者は、エックハルトの反トマス主義を際立たせたわけであるが、エックハルトのトマスへの親近性もまた度外視されるべきではないだろう。エックハルトの内には、トマス思想との一致も見出せるからである。しかし、いわゆる「ドイツ神秘主義」が、ギリシア—アラビア哲学の精神から発するとする著者の視点は、極めて示唆に富んでおり、今後のエックハルト研究に多大な恩恵をもたらすものであるといえよう。